

原 著

## つながりの実感および老年的超越からみた後期高齢者 および超高齢者の主観的幸福感

小野聡子\*<sup>1</sup> 福岡欣治\*<sup>2</sup>

### 要 約

超高齢期における幸福な老いに関して Tornstam による老年的超越理論が提唱されているが、日本での研究からは Tornstam の主張と異なる部分が指摘されている。本研究でその中から特に「つながりの実感」の重要性に着目し、身体機能が衰えつつある施設利用高齢者におけるつながりの実感、老年的超越と主観的幸福感との関連を検討した。高齢者7名を対象とする半構造化面接によってつながりの実感に関する語りがみられることを確認した上で、超高齢者53名・後期高齢者58名を分析対象とする質問紙調査を実施した。ADL を統制した偏相関分析の結果、後期高齢者ではつながりの実感のみが、超高齢者ではつながりの実感と老年的超越の両方が、主観的幸福感と有意な正の関連性を示した。なお、つながりの実感と老年的超越の間には有意な正の相関があり、その値は後期高齢者以上に超高齢者で大きい傾向にあった。幸福な老いを支える要素としての「つながりの実感」の重要性と、超高齢期以降における老年的超越の重要性が示唆された。

### 1. 緒言

#### 1.1 高齢者における「幸福な老い」と老年的超越

我が国の65歳以上の高齢者人口は、2016年には26.7%に達しており、特に75歳以上の後期高齢者が総人口の12.9%を占めている<sup>1)</sup>。85歳以上の超高齢者 (the oldest-old) とよばれる年齢層の人口増加も進んでいる。高齢者は、加齢によってほぼ例外なく身体的な衰えを経験する。超高齢者では、自立した生活が徐々に困難になっていくケースも多い。しかし、中川<sup>2)</sup>は、高齢者の生活の質 (QOL: quality of life) の評価に関する先行研究を検討し、心理的 well-being は、身体要因よりも社会的要因に規定されることを報告している。権藤<sup>3)</sup>は、前期高齢者から100歳以上までを対象とした縦断的研究<sup>4)</sup>において高齢者の運動機能指標と心理的指標を測定し、運動機能は加齢と共に低下する一方、心理的指標は加齢による差異が見られなかったことを報告している。これらより、身体機能の低下が起こっていても幸福な老いは実現することができると考えられる。超高齢者における幸福な老いに関連して近年注目さ

れている概念に、スウェーデンの Tornstam により提唱された「老年的超越」(gerotranscendence) がある。この概念が提出される以前、従来の幸福な老い (サクセスフル・エイジング) とは、高齢期においても活動的・生産的であり、若いときの状態を維持するという活動理論にもとづく考え方が主流を占めていた<sup>4)</sup>。その中心的な要因は、認知機能・身体機能の維持と社会参加である<sup>5)</sup>。このような考え方はしばしば、いかに老いを食い止めるかというアンチ・エイジングの考え方と結びつく<sup>6)</sup>。これに対して老年的超越の考え方では身体機能の維持と社会参加を重視せず、むしろ高齢期に高まる状態像としての自然な変化に注目する<sup>7)</sup>。それゆえ「もう一つのサクセスフル・エイジング」とも考えられており<sup>8)</sup>、従来のサクセスフル・エイジングを問い直す重要な示唆を与えるもの位置づけられている<sup>9,10)</sup>。

老年的超越とは、Tornstam によれば「物質主義的で合理的な世界観から、宇宙的、超越的、非合理的な世界観への変化」を指し、「宇宙的意識の獲得」「自己意識の変化」「社会との関係の変化」の3次元

\*1 片山内科クリニック

\*2 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科  
(連絡先) 福岡欣治 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学  
E-mail: fukuoka@mw.kawasaki-m.ac.jp

が含まれる<sup>11-13)</sup>。例えば、宇宙意識の領域では、自己の存在や命が過去から未来の大きな流れの一部であることを認識し、最終的には宇宙という大いなる存在につながっているという認識を持つこと、死への恐怖も消えていくことなどが挙げられる。自己意識の領域では、西洋的な強い自我が変容し、こだわりが低下し、他者を重んじる利他性が高まることなどが挙げられる。社会との関係の変化では、対人関係が急激に狭くなること、社会一般的な常識を重んじなくなることなどの特徴があるとされる。超高齢者の幸福な老いを捉える上で、基本的に老年的超越理論は支持されている<sup>14,15)</sup>。

## 1.2 日本での研究における老年的超越理論との不一致

しかし、日本人高齢者の「幸福な老い」については、老年的超越理論との不一致も認められている<sup>16)</sup>。実証研究の知見として、富澤<sup>17)</sup>は、日本人の「幸福な老い」は、家族や友人とともにある孤立しない生活であると述べ、奄美諸島在住の超高齢者を対象に行った研究から、Tornstamの「社会との関係の変化」領域の内容とは異なる発言が見られたことを報告している。また、増井<sup>18)</sup>は日本の都市部の虚弱超高齢者を対象とした研究から、Tornstamの老年的超越の内容は確認できたが、先祖や未来の子孫とのつながりを強く感じるようになるという日本独自の特徴がみられたことを報告している。さらに、中川<sup>19)</sup>は、85歳以上の高齢者8名の面接調査から見出された「生 (life)」の意味や価値観に関わる4つのテーマの第一に、家族や先祖、子孫や身近な神仏と「つながっていること」を報告している。

増井<sup>16)</sup>は、日本の超高齢者を対象とした研究で、Tornstamの主張する老年的超越理論との不一致を、以下の4点にまとめている。第一に、生に対する神秘主義的な感覚や既存の宗教的観念の超越ではなく、身近な宗教心が高まること、第二に、家族に支えられていることを望み、他者への依存が肯定されること、第三に、時間や空間に対する非合理的な感覚ではなく、先祖や未来の子孫とのつながりを感じることで、第四に、自己中心性が減少し利他性が高まるだけでなく、あるがままを受け入れ、自然に任せることである。

## 1.3 「つながりの実感」への注目と、本研究の目的

前項で述べた先行研究<sup>16-19)</sup>より、日本の高齢者とりわけ超高齢期を迎える高齢者にとって、老年的超越理論の主張の一部に実感と異なる部分があると言える。そこで本研究では、新たに「つながりの実感」にその中心的な部分を想定する。

本研究で扱おうとする「つながりの実感」とは、

老年的超越理論が想定するような時間や空間を超越するような非合理的な感覚とは異なる。過去や現在において、事実として存在し関わってきた人や大切にしている習慣、現時点では直接に可視化することはできないが過去には確かに存在していた、あるいは将来存在することになるであろう自分の先祖や子孫のことを想い、親和性を感じることである。これらは、Tornstamの老年的超越理論でいう「宇宙的意識の獲得」の中の「一体感の獲得」と部分的に重なるものである。しかし、宇宙的意識にみられる時間や空間に対する非合理的な感覚とは異なる。むしろ、縮小しつつも維持される家族との心理的な関わりや、あるいは施設利用等によって新たに生まれる施設職員や他の利用者との社会関係、他者への依存の肯定、そしてそれ以前から身近なものであった先祖や神仏とのつながりを実感することと関連するものである。

本研究では、超高齢期の前後を迎える日本の高齢者の老いにかかわる「つながりの実感」に注目し、その把握を試みるとともに、主観的幸福感との関連からみた「つながりの実感」の重要性を検討する。具体的には、まず高齢者への面接調査により、「つながりの実感」に関する記述的な情報を収集する。さらに、それらをふまえて「つながりの実感」に関する尺度を試作し、老年的超越に関する尺度と併用して、質問紙調査により主観的幸福感との関連を検討する。本研究は、探索的ではあるものの「つながりの実感」に対する注目という視点とその測定による定量的な分析結果を示し、今後の研究の発展に寄与することを目指す。

## 2. 面接調査

### 2.1 目的

高齢者が自らの老いについて、また「つながりの実感」に対しどのような認識を抱いているのかについて、半構造化面接法により記述的な情報を収集する。

### 2.2 方法

#### 2.2.1 調査対象者

A県内の高齢者福祉施設に通所しており、身体的な機能の衰えから自立生活に困難を生じつつあるが、認知機能には顕著な低下がなく面接調査が可能な高齢者7名(男性2名、女性5名;66~94歳)を対象とした。

#### 2.2.2 調査内容

インタビューガイドとして「デイサービスではどのようなことをされて過ごされていますか」「(同居していない)子どもと会うことはありますか」「ご

両親のことを思い出すことはありますか」「両親とご自身が似てきたと感じることはありますか」「歳をとって生活は以前と変わりましたか」などの質問を設けた。

### 2.2.3 手続き

A 県内の高齢者福祉施設1施設の協力を得て、2016年8月中旬～下旬に実施した。施設長の了解を得て、障害高齢者の日常生活自立度のランク J-2, A, B, かつ、認知症高齢者の日常生活自立度ランク I あるいは II の範囲に該当する人の中から協力が可能な人を紹介していただき、研究者と補助員の2名が1組となって高齢者福祉施設内で個別に面接をおこなった。なお、これらの対象者は、身体的障害はあっても寝たきりでなく座位を保って会話ができる人、認知症の症状はあっても軽度で、周囲の配慮により自立した生活が可能である人を意味する。対象者1名あたりの実施時間は説明から終了まで含めて30～60分程度であった。対象者の許可を得て IC レコーダーに録音し、中川ら<sup>12)</sup>を参考に逐語録を分析した。

### 2.2.3 倫理的配慮

研究協力者に対して研究の目的を説明し、プライバシーの保護、途中で中断および中止ができることについて口頭および紙面で説明した。その後、調査協力への同意を書面にて得た。面接中は、調査協力者の体調に十分配慮した。本研究を実施するにあたり、川崎医療福祉大学倫理委員会の承認を得た（承認番号16-022号）。

## 2.3 結果と考察

7名の対象者から得られた語りを、「同居している家族とのつながり」、「同居していない家族とのつながり」、「先祖や子孫とのつながり」、「近所の人とのつながり」、「デイサービスでのつながり」、「日常生活の日課・様子」、「現在の生活に対する考え方」に分類した。その概要は、表1に示すとおりである。

対象者は総じて、身体機能の衰えを感じつつも、毎日の生活を送っている中に人とのつながりを実感している様子であった。また、日々の生活の中に習慣があり、お墓参りを定期的に行っているという様子が見えられた。さらに、普段は会うことのできない息子のことを思い過ごしていることなどの語りが得られ、対象者7名の語りの内容には共通性が見られた。例えば、「遠方に住む長男とはなかなか会えないが心配はいつもしている。台風の際は電話もする」、「夫が死んでから、お仏壇を拜むようになった。普段思い出すことは少ないが、ときどき夢にでてくる」「両親については最近あまり考えないけどお墓参りには月に1回くらい行く」などが語られた。これらは、家族や先祖、子孫や身近な神仏と「つながっ

ていること」という中川ら<sup>19)</sup>の知見と対応しており、Tornstam の老年的超越理論における神秘主義的な感覚や既存の宗教的観念の超越、時間や空間に対する非合理的な感覚といったものとは異なるものといえる。

## 3. 質問紙調査

### 3.1 目的

面接調査の結果をふまえて「つながりの実感」の測定項目を作成し、後期高齢者および超高齢者への質問紙調査によって、「つながりの実感」ならびに老年的超越と主観的幸福感の関係を検討する。

### 3.2 方法

#### 3.2.1 調査対象者

身体機能の低下がみられる超高齢期前後の高齢者として、高齢者福祉施設の通所者で認知症の症状がない人を対象とした。75歳以上の回答者で性別が未記入であった人を除き、分析対象者は111名であった。内訳は、85歳以上（～97歳）の超高齢者が53名（男11人、女42人）、75～84歳の後期高齢者が58名（男11人、女47人）であった。

#### 3.2.2 測定内容

##### (1) つながりの実感

面接調査で得られた語りを中心としつつ、既存の複数の尺度からも「つながりの実感」を表すと考えられる内容を検討し、最終的に23項目の尺度を作成した(表2)。参照した既存尺度は、ソーシャルサポート<sup>20)</sup>、共同体感覚<sup>21)</sup>、被受容感<sup>22)</sup>等であった。各項目について、自分自身にあてはまるかどうかを、「はい」(1点)、「いいえ」(0点)で回答するよう求めた。概念的に一次元性を仮定し、信頼性係数を確認した上で合計点を算出した。

##### (2) 老年的超越

増井ら<sup>23)</sup>の改訂版日本老年的超越尺度27項目を用いた。原版は4件法であるが、本調査では「つながりの実感」と同じく「はい」「いいえ」の2件法とした。原版は8因子からなるが、本調査のデータでは原版と同じ因子構造は認められず、原版で想定される下位尺度別の信頼性係数も低かったため、全体での合計点を算出した。

##### (3) 主観的幸福感

増井ら<sup>18)</sup>と同様に改訂版 PGC モラール・スケールの日本語版<sup>24)</sup>17項目を用いた。各項目につき2段階または3段階であり、肯定的な選択肢が選ばれた場合に1点、その他の場合には0点として合計点を算出する尺度である。

##### (4) その他

精神的健康の指標として WHO-5簡易版<sup>25)</sup>、抑う

表1 対象者の各テーマに対する語りの一覧

対象者	同居している 家族とのつながり	同居していない 家族とのつながり	先祖・子孫 とのつながり	近所の人 とのつながり	デイサービス でのつながり	日常生活の 日課・様子	現在の生活に 対する考え方
A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・夜ご飯の後はTVの前に座って、家事(繕い物, 洗濯)している。</li> <li>・みんなでご飯を囲むのが楽しい。</li> <li>・家族はやっばり大事ですね。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・孫はいる。1番下が中学2年生で3人いる。もう大きいから、なかなか会うことは無い。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・杖があるから(足が悪いから)、最近はめっきり出かけない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・みなさんに会って、お話することが楽しい。</li> <li>・自分は話下手だけど、声をかけてくれて話を聞くのが楽しい。</li> <li>・ここへ来て、座っていると落ち着く。自分の席にいと安心。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・朝の食事を自分で準備する(長男家族はパン、自分のご飯)。</li> <li>・時間があれば、新聞を読む。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・若いときは忙しくしていた、今はゆっくりしている。今は、幸せ。戦争もないし。</li> <li>・しんどいこともあるけど、乗り越えたいとしかたないと思っている。</li> </ul>
B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家内と暮らしている。老々介護ですわ。</li> <li>・戦争から帰って、すぐに結婚して、それからずっと一緒にいる。</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>・加齢とともに自分の動きがゆっくりするようになった。&lt;どこまでいくんですか?&gt;って声をかけられて、答えたら、丁寧に教えてくれて、目的地に間に合ったということがあった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・足湯をして、足をもんでもらう。どこでもしてくれないことをきちっとしてくれる。ここは、居心地がいい。</li> <li>・あんまり自分から話さない。でも話をする人は決まっています。自分が耳が悪いことを知ってくれている人。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・耳が聞こえにくい、目も悪くなってきた。</li> <li>・今の身体機能については、どうにもならないって諦めている。</li> <li>・デイサービスにお世話になると思ってた。デイサービスにこれることはありがたい。</li> </ul>
C	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一緒に住んでいる主人とはあまり話しをしない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・兄弟はいないし、いとこは疎遠。</li> <li>・お盆も集まらずに、ゆっくり過ごした。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お仏壇には、両親と兄2人がいる。いつも手を合わせている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遊びに来てくれたり、ときには電話してくれる。自分からときどき遊びに行く。</li> <li>・近所のおばあさん(80代)に付き合う。年齢の差は気にならない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・手作業(折り紙、塗り絵)します。みんなでしていたら、嫌なことを考えなくて良い、気がまぎれるし落ち着く。</li> <li>・みんなと話すのが楽しい。&lt;あれしよう&gt;って職員が声掛けてくれるのが楽しい。</li> <li>・家にいる時に比べて、ここに来ていほうが楽しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・食事をして、決まった時間にデイサービスの迎えを待っている。</li> <li>・本を読んだりする。</li> <li>・洗濯物をして、たんで、晩ごはんをこしらえる。</li> <li>・幸せと、思うことは、みんなと話しをすること。みんな良い人ばかりです。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・歳を取ることにについては、自然に毎日を繰り返していたら、いまだだった。</li> <li>・これから先のことが心配になることがある。</li> </ul>
D	<ul style="list-style-type: none"> <li>・デイサービスに行く前は妻は仕事に行っていて、帰ったら妻も戻っている。</li> <li>・家では、あまり会話はしない。一緒にいるだけ。</li> <li>・あの人(妻)は、元気がとり得だから、好きなことをしているときに自分は何も言わない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・息子は2人とも県外にいて、正月にしか会わない。</li> <li>・台風とか地震があったら、元気がなくて心配になる。</li> <li>・親戚での集まりは、深いつながりがないから、なかなか集まってみんなで話すのはすき。</li> <li>・来月、親戚で集まる機会がある。それが楽しみ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもは好きなだけ、子どもが3人いるんだけど、孫はまだです。いたら楽しいと思う。</li> <li>・仏壇は、両親の位牌がある。御茶湯はできない。自分のことで精一杯。</li> <li>・自分の父と比べて、妻に&lt;近くなってきた&gt;と言われてドキっとした。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昔(身体機能が維持されていたとき)は、フットボールの監督をしていた。</li> <li>・働いていた頃の仲間とは、会うことはないけど、年賀状のやりとりはしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・手芸をしたり、教えてもらったりするのが楽しい。</li> <li>・ここは天国みたい。帰ったら自分のことを1人でせんといけん。</li> <li>・脳トレで優しい問題を職員の方が出してくれる、難しいことはない。</li> <li>・1番いいのは、お風呂と昼ごはん。自分ひとりだとできないから。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・朝は、最低限、自分の用意をして、デイサービスの迎えを待つ。</li> <li>・大事にしているもの、それは、命じゃね。それと家族の命。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年をとるのは仕方が無いと思う。もう少し長く思っている。1年がすぐ。</li> <li>・なるようになると思ってた。目標は、平均年齢。</li> </ul>

(前ページより続く)

対象者	同居している 家族とのつながり	同居していない 家族とのつながり	先祖・子孫 とのつながり	近所の人 とのつながり	デイサービス でのつながり	日常生活の 日課・様子	現在の生活に 対する考え方
E	<ul style="list-style-type: none"> <li>・草取りや掃除は足が自由に動かないからできないが、家の者が気をつけてくれる。</li> <li>・ご飯を部屋まで持ってきてくれたりいつも感謝している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもを授からなかったために、娘(主人の姪)を養子にもらった。現在は、孫が3人いる。</li> <li>・離れてても考えている。一生懸命大事にしてくれるのが嬉しい。週末に会うのが楽しみ。</li> <li>・今年の年金を上手に使って残った分で曾孫を喜ばせているんです。</li> <li>・子どもを見るのは、好きというか、可愛いって思う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・夫が死んでから、お仏壇を拝むようになった。普段思いつくことは少ないが、ときどき夢にでてくる。</li> <li>・両親のことは考えることはよくある。</li> <li>・初詣に行った時に、孫たちが手を繋いで話しながら歩いているのを見て、嬉しい気持ちになった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ここへは、近所の人と一緒に歩いて通うようになった。</li> <li>・愛犬と一緒に散歩をする。橋の下が公園で影になっていて涼しい。そこで近所の人々が3〜4人集まっているところまで行って、ちょっと遊んで、話したりする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スタッフの方が、いろいろ手を尽くしてくれるため、来るのが楽しい。家にも寂しいから。</li> <li>・ここでは、いろいろなことを退屈しないようによくしてくれる。風呂にいかせてくださったり、あしをもんでくださったりする。これなら毎日来たい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ひとりだと家にも飽きるが、誰かにどこかへ連れていってもらおうと気が違って楽しい。</li> <li>・自我流だが、長生きをしたいから毎朝体操をする。</li> <li>・家で一人の時は、短歌と俳句と川柳を新聞に出している。時々、入選する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・若い頃は、兄弟、子ども、孫のお世話をよくやってきたと思っている。</li> <li>・自分が生きてても、役に立つことはないと思う。でも、曾孫は私と会うと、喜ぶ。私は、お手玉や財布とかは縫ってあげる。</li> <li>・今の自分が家族にできることとして、お金を出すくらいだけど、1年に2.3回は焼肉を食べに連れて行くんです。</li> </ul>
F	<ul style="list-style-type: none"> <li>・夫婦で助け合って生活している。お風呂も、寝るのも一緒である。なぜなら旦那は自己管理できない。だから一緒にいるんです。</li> <li>・主人は私がそばにいて「有り難い」と言ってくれて、私も嬉しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・独立して結婚した子どもたちは、主人と私がいたからこそ存在する。</li> <li>・子どもたちには「私たちが親の背中を見てたくましく生きて欲しい」と思っている。</li> <li>・長男は、施設に通所するように毎日電話をくれる。「心配しないで」って言うけどありがとうと思っている。</li> <li>・その子どもが孫を連れて家に来ることが嬉しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仏様への感謝は大事だと思う。</li> <li>・仏壇へのお供え(お茶、庭の花、近所からのいただきもの)を定期的に行っている。</li> <li>・お墓参りははっきりしている。先祖が居てこそ自分であり、全部が積み重ねだと思っている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・感謝の言葉を大切しないといけないと思っている。人とのつながりが何を言っても大切だから。</li> <li>・自分から挨拶をして、「声をかけてもらって元気が出る」と言われることで自分も嬉しい。</li> <li>・人を羨ましいとは思わない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・旦那と一緒に通っている。でも旦那は、通所することに気が進まない様子である。</li> <li>・「私を施設へ連れて行って」と言いつつ、夫婦で通所している。</li> <li>・施設への要望は、自分が自立しながら、できないところは助けてほしいと思っている。</li> <li>・スタッフの方は良くしてくれるから嬉しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・読書をするのが日課。吸収できることがたくさんあるから。</li> <li>・日記を書くこと。</li> <li>・整理整頓。こころの鏡も磨いておきたいと思っている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・夫婦が1番、次に子どもが大切だと考えている。</li> <li>・人に感謝すること、モノを大切にすることが大事だと思っている。</li> <li>・人との関係性が大事だと思う。</li> <li>・身体が動くうちは、人のことを助けたいと思っている。</li> <li>・生きてると、苦しいことがあるけど、どうどうと生きていたいと思っている。</li> </ul>
G	<ul style="list-style-type: none"> <li>・次男とは1ヶ月の間、顔を合わさないことがある。しかし、携帯で呼んだら来てくれる。</li> <li>・次男と顔を合わせなくても、車があるのを見て仕事に行っていることを確認する。</li> <li>・食事は、別々にとっている。私も自分のことを自分でしている。</li> <li>・お風呂は(次男と)供用であるために洗濯物は自分のものと一緒にしてあげている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遠方に住む長男とはなかなか会えないが心配はいつもしている。台風の際は電話もする。</li> <li>・娘は、毎週日曜日に会いに来てくれる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・両親については、最近あまり考えないけどお墓参りには月に1回くらい行く。</li> <li>・お仏壇は母屋にあって、離れているけど、御茶湯はしている。</li> <li>・孫はいない。欲しかったけど、もう諦めた。でもな、小さい子を見ることは好き。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・庭をきれいにしていると、近所の人々が声をかけてくれる。声をかけてくれて話をするのが楽しい。</li> <li>・病気をする前は、習い事をしてた。友達に「早くまた一緒にやろう」と誘われている。元気がになったら改めて通おうと思っていた習い事も解散になった。先生も、私たち生徒も高齢になった。高齢化のしわ寄せを感じる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・デイサービスには週に2回通っている。</li> <li>・デイサービス利用者は似た者同士で落ち着く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・草取り、枯れた花を取る、水遣いをするのが毎日の日課である。</li> <li>・庭で野菜を作っていて、頼りになる弟が家まで苗を持ってきてくれる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体力に自信がなく疲れやすいと感じている。</li> <li>・歳をとって迷惑をかけるのは嫌だ。でも、こうなったらしょうがないと受け入れている。</li> <li>・病気で「もう死んでもいい」と思った。けど、家に帰ったら「死ねない」と思った。</li> <li>・平均寿命まで生きられれば良い。</li> <li>・「後期高齢者」という通知が来て嫌な気分がした。</li> </ul>

表2 つながりの実感に関する測定項目

- 
1. 若い頃と比べて、祖先を身近に感じますか
  2. 子どもや孫に会うことが楽しみですか
  3. 友達に会うことが楽しいと思えますか
  4. 子どもを見るのが好きですか
  5. ご両親を思い出すことはありますか
  6. あなたを元気づけてくれる人はいますか
  7. 大切な人が元気でいてくれると嬉しく思えますか
  8. 自分はひとりではないと感じますか
  9. 自分は両親に似てきたと感じますか
  10. あなたは、周りから守られている感覚がありますか
  11. あなたは、誰かのためになにかをしてあげたいと思えますか
  12. 若い頃の人付き合いは現在も続いていますか
  13. すぐに会うことのできない人のことも思い浮かべて傍に感じるがありますか
  14. 人が集まっているところへ行行って話しをすることが好きですか
  15. 困難に直面した時に、頼りになる人がいますか
  16. お仏壇を拝むことを大切だと思えますか
  17. お墓参りをすることは大切だと思えますか
  18. 幼少期に見た景色を思い出してなつかしいと思えますか
  19. 神仏に感謝することはありますか
  20. 人と一緒に何かをすることを楽しいと思えますか
  21. 幼少期に過ごした場所を思い出すとあたたかい気持ちになりますか
  22. 人から話しかけてもらうことを嬉しく思えますか
  23. 毎日の生活の中で大切にしている日課はありますか
- 

つの指標としてGDS<sup>26)</sup>、ADLの指標として老研式活動能力指標<sup>27)</sup>を用いた。WHO-5簡易版とGDS5は各5項目、老研式活動能力指標は13項目からなる。これらはいずれも先行研究<sup>18,23,28)</sup>での使用にもとづき選択され、項目内容および採点方法等も同様であった。これらに加え、個人属性として性別、年齢、施設利用期間についてたずねた。

### 3.2.3 手続き

A県内の高齢者福祉施設（3施設）の協力を得て、2016年10月下旬～11月中旬に調査を実施した。75歳以上でかつ現在重度認知症のない利用者の全員に配布するよう施設職員へ依頼した。自記式での回答が難しい場合には各施設職員の読み上げ・代筆による回答も可能であることを伝えた。回答者の選定についての判断は、調査協力者が高齢者福祉施設に通所を開始する際に提出した書類をもとに、日常的に利用者を観察しかつ研究内容に対しては第三者に相当する施設職員がおこなった。事前に回答可能な利用者の概数を確認し、3施設で計130部を用意した。対象者には回答後はそれぞれ個別の封筒に入れ密封していただき、密封された状態のものを各施設にて回収してもらった。所定の期間を経過後、各施設から完了の連絡を受けて研究者が訪問し、取りまとめられた調査票を直接回収した。

### 3.2.4 倫理的配慮

事前に高齢者福祉施設長および施設責任者に調査について説明し、書面にて同意を得た後、担当施設職員を通じてそれぞれの高齢者に調査票が配布された。調査票は、調査への協力依頼の文書と回答済み用紙封入用封筒を添え、1部ずつ封筒に入れて用意した。協力依頼の文書には、得られたデータは厳重に保管し研究以外の目的で使用しないこと、個人が特定されることはないこと、回答は強制ではなく、白紙で提出しても良いことを明記した。それらを調査票冒頭でも改めて説明し、調査票への回答をもって同意とみなした。本研究の実施にあたり、川崎医療福祉大学倫理委員会の承認を得た（承認番号16-064号）。

### 3.2.5 分析手順

最初に尺度の信頼性を検討するため、各項目の回答分布を確認後、各尺度におけるCronbachの $\alpha$ 係数を算出した。その後、回答者の年齢群（後期高齢者か超高齢者か）およびADLと各尺度得点の間に関連があるかどうかを確認した。その結果にもとづき、有意な関連のみられたADLを統制したうえで、各尺度得点（変数）間の偏相関係数を算出した。なお、統計処理にはSPSS Statistics version 24またはversion 18を用いた。

### 3.3 結果と考察

#### 3.3.1 尺度の信頼性と記述統計

各項目の回答分布に極端な偏りがないことを確認した後、それぞれの尺度について Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した (表3)。その結果、一部に  $\alpha$  係数の低い尺度がみられたが、許容範囲内であると判断し、解釈上の留意が必要であることを認識しつつ後の分析をおこなった。各尺度の項目に対する評定を単純加算して合計点を算出し、 $t$  検定により後期高齢者と超高齢者の比較をおこなった。その結果、ほとんどの尺度において有意差が認められず、唯一、主観的幸福感の後期高齢者よりも超高齢者の方が高得点であった ( $t=2.29, p<.05$ )。なお、ADL の得点は後期高齢者と超高齢者で有意差がなかったがともに8点前後と低く、施設通所者であることを反映した結果であった。

#### 3.3.2 変数間の関連性

老年的超越が特に超高齢者の老いに対して提唱された概念であることから、年齢群別に変数間の関連性を検討した。この際、単相関で ADL が他の多くの変数と関連していたことから、これを統制変数とする偏相関係数を算出した (表4)。

「つながりの実感」および老年的超越と主観的幸福感を中心とするその他の変数との関係に注目すると、まず主観的幸福感と「つながりの実感」は年齢群を問わず正の有意な関連を示したが、老年的超越は超高齢者群のみで関連していた。また、精神的健

康については、「つながりの実感」は超高齢者群で正の有意傾向の関連がある一方、老年的超越は後期高齢者群のみ有意傾向であり、かつその符号は負であった。さらに、抑うつについては、「つながりの実感」とは後期高齢者群で有意、超高齢者群では有意傾向の負の関連性がある一方、老年的超越との間には、年齢群を問わず有意な関連が認められなかった。なお、老年的超越と「つながりの実感」との間には有意な正の相関があり、この関連性は後期高齢者よりも超高齢者において相対的に大きいようであった。

これらの結果からみて、「つながりの実感」は後期高齢者と超高齢者の両方で主観的幸福感や精神的健康、抑うつと幅広く関連する一方、「老年的超越」は超高齢者のみで主観的幸福感と関連し、精神的健康や抑うつとの関連は部分的であった。本研究の対象者が施設通所者であり ADL が低いこと、および上記が ADL を統制した偏相関分析によるものであることを考え合わせると、身体機能が衰えつつある高齢者にとって、「つながりの実感」は幸福な老いのためにより普遍的な価値をもつと考えられる。また、老年的超越は超高齢期の老いに特化して幸せな老いと関連する概念であると思われる。ただし、「つながりの実感」と老年的超越の間には正の関連があり、両者は背反するものではなく、関連を持ちつつ高齢者とりわけ超高齢者の主観的幸福感の維持に貢献するものであると考えられる。

表3 尺度の信頼性、平均値、標準偏差

指標	後期高齢者(75-84歳)				超高齢者(85歳以上)			
	n	$\alpha$	平均	SD	n	$\alpha$	平均	SD
つながりの実感	55	.85	18.87	4.11	48	.81	19.02	3.70
老年的超越	52	.53	19.29	3.24	48	.61	19.04	3.62
主観的幸福感(PGC モラール・スケール)	56	.76	9.14	3.65	49	.72	10.71	3.35
精神的健康(WHO-5)	56	.50	8.18	1.39	48	.88	8.00	1.44
抑うつ(GDS5)	57	.81	10.25	2.71	53	.54	10.19	3.23
ADL(老研式活動能力指標)	52	.71	8.49	2.83	52	.69	7.56	2.86

表4 ADLを統制した偏相関係数

指標	①	②	③	④	⑤
① つながりの実感		.54 ***	.34 *	.27 +	-.27 +
② 老年的超越	.37 **		.38 *	.26	-.22
③ 主観的幸福感	.47 ***	.19		.54 ***	-.42 **
④ 精神的健康	.06	-.27 +	.29 *		-.56 ***
⑤ 抑うつ	-.35 *	-.05	-.42 **	-.48 ***	

+ $p<.10$ , \* $p<.05$ , \*\* $p<.01$ , \*\*\* $p<.001$

注) 左下: 後期高齢者, 右上: 超高齢者

#### 4. 総合考察

##### 4.1 高齢者における「つながりの実感」と老年的超越

本研究では、老年的超越理論と日本の高齢者を対象とした研究での知見を背景に、とりわけ超高齢期を迎え身体機能の衰えがみられる高齢者の老いを支えるものとして、「つながりの実感」を想定した。これは老年的超越理論で指摘される「一体感の獲得」と部分的に重なりをもつが、同理論においては「宇宙的意識」の一部とされ、時間や空間に対する非合理的な感覚として位置づけられている。本研究でのそれは、現実に存在する、あるいは過去に現実のものとして存在した対人関係あるいは生活環境、さらに高齢期以前から身近なものであった先祖や神仏との主観的な結びつきと関連する。

面接調査では、このような意味における「つながりの実感」に相当する内容が語られるかどうかに関心を当てた。結果として得られた、遠方に住む子どもを思うことや、亡くなった配偶者や両親を思い出して仏壇を拝んだり墓参りをしたりするという語りは、増井<sup>16)</sup>が指摘した、身近な宗教心の高まりや先祖や子孫あるいは家族との関係と対応するものである。他方、質問紙調査では、このような面接調査をふまえて作成した尺度の得点が、老年的超越と正の関連を示した。本研究で測定した「つながりの実感」の内容は、日本の高齢者においてむしろその一部分を構成するものとも考えられる。このような考察もまた、やはり日本における老年的超越研究から導かれた増井<sup>16)</sup>の指摘と整合する。

本研究で導いた「つながりの実感」の語りやその測定は、総じて、従来の日本における老年的超越をめぐる知見や議論と矛盾せず、それらを補完するものとして位置づけることができると考えられる。

##### 4.2 「つながりの実感」および老年的超越と、幸福な老い

本研究の中心的な知見は、「つながりの実感」が後期高齢者群と超高齢者群の両方で主観的幸福感と正の関連を示し、また精神的健康や抑うつ指標の間にも有意傾向ながら整合性のある関連性が認められたことである。加えて、老年的超越については後期高齢者群で主観的幸福感との有意な関連が認められず、超高齢者群のみで主観的幸福感と関連していた。このことはまず、「つながりの実感」が、本研究の対象者における幸福な老いと、一貫した結びつきをもつことを示す。そして、老年的超越については超高齢者に該当する幸福な老いの要素であることを示唆する。

本研究の対象者は、高齢者施設を通所利用する75

歳以上の高齢者であり、ADLは相対的に低い。高齢期には一般に、人間関係のネットワークは縮小する<sup>29)</sup>。直接の測定はおこなっていないが、本研究の対象者の特性から、広い対人的ネットワークをもつアクティブな高齢者像を描くことはできない。他方で、特に超高齢者ではない後期高齢者にとっては、活動水準の高い同年代の人が少なくない。活動水準の高い人であれば存在するであろう他者との直接的で多様な実際の相互作用が、本研究の対象者においては相対的に少ないと考えられる。そのような中にある「つながりの実感」（相互作用が相対的に少ないとしても、つながりを感じられること）が特に幸福な老いを支えることになると考えられる。

もちろん、本研究のサンプルは極めて小さい。本研究の知見の一般性は、今後の再検証を必要とする。

超高齢者における老年的超越と主観的幸福感の有意な関連性は、本研究の結果が従来の研究の知見と整合性をもつことを意味する。本研究は従来の老年的超越概念との部分的な相違の指摘から「つながりの実感」への注目という視点を提供するものであるが、これは老年的超越が特に超高齢者の幸福な老いにとって重要である<sup>14,15)</sup>という指摘を否定するものではない。本研究の超高齢者群における老年的超越と主観的幸福感との相関は、「つながりの実感」のそれとはほぼ同じであった。本研究の場合、超高齢者群の最高齢者は97歳であったが、さらに高齢の、たとえば100歳以上のいわゆる百寿者における主観的幸福感との相関は、「つながりの実感」よりもむしろ老年的超越の方が高くなるかもしれない。

ただし、たとえば百寿者における主観的幸福感には、老年的超越とは別にソーシャルサポートもまた重要であるとする指摘もある<sup>30)</sup>。ソーシャルサポートと「つながりの実感」は類似の概念ではあるが同一ではない。前者は現時点で存在する対人関係を前提とするのに対して、後者はそれを包含しつつ、過去に存在した、あるいはかつて身近であった家族や先祖との結びつきまで含む概念である。その意味においても、老年的超越と「つながりの実感」は密接に関連しつつ、両者ともに高齢者の幸福な老いの構成要素として重要であり続けると考えられる。

##### 4.3 本研究の限界と展望

本研究は小規模な横断研究であり、代表性のあるサンプルとは言い難く、変数間の因果関係を示すものではない。また、対象者は高齢者福祉施設の利用者に限られている。その知見の一般性は、より広範なサンプルを対象とした研究での再検証を必要とする。

このことに加えて、本研究には測定上の問題があ

る。まず、「つながりの実感」尺度は、面接調査を経て作成され一定の信頼性を有しているとはいえ、尺度としての妥当性の検証は経ておらず探索的な把握に留まる。また、老年的超越尺度の選択肢を変更したことで、先行研究と尺度得点の比較ができず、因子構造の不安定さから全項目での得点を算出したが、本来は Tornstam の主張する3次元をふまえた因子別の検討が理想であった。老年的超越尺度については原版<sup>28)</sup>の報告でも  $\alpha$  係数は低いが、今後はこれらについてより確実な測度を用いるべきである。

また、本研究では対象者の ADL を測定したが、認知機能については各施設職員の判断に委ねられた。高齢者の場合、ADL や認知機能が主観的幸福

感の高さに影響する<sup>31)</sup>。より精緻な把握の一部として、今後は認知機能の高さについても測定あるいは厳密に統制する必要があると考えられる。

老年的超越に関する日本独自の知見を臨床現場に生かすために、増井<sup>15)</sup>は、介護職員の教育や高齢者への支援活動に取り入れる試みを紹介している。本研究の結果からは、身体機能が低下し対人関係および生活範囲の縮小しつつある後期高齢者および超高齢者にとって「つながりの実感」を持てることが大切であるが、いかなる取り組みがそのような実感を持つに貢献するかについての実証的な検討は、未着手の課題として残されている。

#### 謝 辞

本研究は、筆頭著者による平成28年度川崎医療福祉大学医療福祉学研究所臨床心理学専攻の修士論文をまとめたものであり、同専攻の多くの先生方よりご指導を賜りました。調査の実施にあたりご協力を賜りました高齢者福祉施設職員の皆様、面接調査および質問紙調査の対象者として質問にお答えくださった施設利用者の皆さま、そして調査全体のコーディネートにご助力をくださいました小野義弘様に深く感謝申し上げます。

#### 注

†1) SONIC 研究 (Septuagenarians Octogenarians Nonagenarians Investigation with Centenarians) と呼ばれる研究プロジェクトの一部である<sup>3)</sup>。

#### 文 献

- 1) 内閣府：平成28年版高齢社会白書（全体版）（PDF 形式）。  
[http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/zenbun/28pdf\\_index.html](http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/zenbun/28pdf_index.html), 2016. (2017.9.28確認)
- 2) 中川威：高齢期における心理的適応に関する諸理論。生老病死の行動科学, 15, 31-39, 2010.
- 3) 権藤恭介：学際研究による老年社会科学からの健康長寿へのアプローチ。日本老年医学会雑誌, 51(1), 35-38, 2014.
- 4) 権藤恭之：日本の読者へのメッセージ。ラーシュ・トーンスタム著、富澤公子、タカハシ・マサミ訳、老年的超越一歳を重ねる幸福感の世界一、晃洋書房、京都、iii-iv, 2017.
- 5) Rowe JW and Kahn RL : Successful aging. *The gerontologist*, 37(4), 433-440, 1997.
- 6) 富澤公子：超高齢者の老年的超越—人生後半の発達と幸福感を紐解く理論—。国際文化政策, (6), 21-29, 2015.
- 7) 伊藤正哉, 中川威：高齢者ほど自分らしく生きている—老年的超越理論からみたエイジング・パラドックス—。アンチエイジング医学, 8(3), 370-374, 2012.
- 8) 中川威：老年的超越理論に関する一考察—実証的研究と批判の動向—。生老病死の行動科学, (13), 93-102, 2008.
- 9) Flood M : Successful aging: A concept analysis. *Journal of Theory Construction and Testing*, 6, 105-108.
- 10) 中蔦康之, 小田利勝：サクセスフル・エイジングのもう一つの観点—ジェロトランセンデンス理論の考察—。神戸大学発達科学部研究紀要, 8, 255-269, 2001.
- 11) Tornstam L : Gero-transcendence: A reformulation of the disengagement theory. *Aging: Clinical and Experimental Research*, 1(1), 55-63, 1989.
- 12) Tornstam L : Gero-transcendence: The contemplative dimension of aging. *Journal of Aging Studies*, 11(2), 143-154, 1997.
- 13) Tornstam L : *Gero-transcendence: A developmental theory of positive aging*. Springer, New York, 2005.
- 14) 権藤恭之：超高齢期の心理的特徴—幸福感に関する知見—。エイジングアンドヘルス, 25(3), 28-31, 2016.
- 15) 増井幸恵：老年的超越。日本老年医学会雑誌, 53(3), 210-214, 2016.
- 16) 増井幸恵：老年的超越研究の動向と課題。老年社会科学, 35(3), 365-373, 2013.
- 17) 富澤公子：奄美群島超高齢者の日常からみる「老年的超越」形成意識—超高齢者のサクセスフル・エイジングの付

- 加要因一. 老年社会科学, 30(4), 477-488, 2009.
- 18) 増井幸恵, 権藤恭介, 河合千恵子, 呉田陽一, 高山緑, 中川威, 高橋龍太郎, 藺牟田洋美: 心理的 well-being が高い虚弱超高齢者における老年的超越の特徴—新しく開発した日本版老年的超越質問紙を用いて. 老年社会科学, 32(1), 33-47, 2010.
  - 19) 中川威, 増井幸恵, 呉田陽一, 高山緑, 高橋龍太郎, 権藤恭介: 超高齢者の語りにもみる生 (life) の意味. 老年社会科学, 32(4), 422-433, 2011.
  - 20) 岩佐一: 高齢者のソーシャルサポート・ネットワーク評価尺度. 老年精神医学雑誌, 22(6), 660-671, 2011.
  - 21) 高坂康雅: 共同体感覚尺度の作成. 教育心理学研究, 59(1), 88-99, 2011.
  - 22) 杉山崇, 坂本真士: 抑うつと対人関係要因の研究—被受容感・被拒絶感尺度の作成と抑うつの自己認知過程の検討一. 健康心理学研究, 19(2), 1-10, 2006.
  - 23) 増井幸恵, 中川威, 権藤恭之, 小川まどか, 石岡良子, 立平起子, 池邊一典, 神出計, 新井康通, 高橋龍太郎: 日本版老年的超越質問紙改訂版の妥当性および信頼性の検討. 老年社会科学, 35(1), 49-59, 2013.
  - 24) 古谷野亘, 柴田博, 芳賀博, 須山靖男: PGC モラル・スケールの構造—最近の改訂作業がもたらしたもの—. 社会老年学, 29, 64-74, 1989.
  - 25) 稲垣宏樹, 井藤佳恵, 佐久間尚子, 杉山美香, 岡村毅, 粟田主一: WHO-5精神健康状態表簡易版 (S-WHO-5-J) の作成およびその信頼性・妥当性の検討. 日本公衆衛生雑誌, 60(5), 294-301, 2013.
  - 26) 遠藤英俊: うつの評価. 鳥羽研二監修, 長寿科学総合研究 CGA ガイドライン研究班, 高齢者総合的機能評価ガイドライン, 厚生科学研究所, 東京, 107-114, 2003.
  - 27) 古谷野亘, 柴田博, 中里克治, 芳賀博, 須山靖男: 地域老人における活動能力の測定—老研式活動能力指標の開発一. 日本公衆衛生雑誌, 34(3), 109-114, 1987.
  - 28) 増井幸恵, 権藤恭之, 中川威, 小川まどか, 高橋龍太郎: 超高齢者の精神的健康の維持に寄与する対人関係のあり方に関する研究—老年的超越の発達を指標として—. ジェロントロジー研究報告 (日本火災福祉財団), 11, 37-47, 2014.
  - 29) 佐藤眞一: 超高齢期のこころ—それぞれの生き方, それぞれの人生—. 佐藤眞一, 高山緑, 増本康平著, 老いのこころ—加齢と成熟の発達心理学—, 有斐閣, 東京, 203-223, 2014.
  - 30) 蔡羽淳: 百寿者の主観的幸福感—100歳以上の高齢者はなぜ幸せか—. 生老病死の行動科学, 21, 45-52, 2017.
  - 31) 佐藤眞一: 高齢期のサクセスフル・エイジングと生きがい. 谷口幸一, 佐藤眞一編, エイジング心理学—老いについての理解と支援—, 北大路書房, 京都, 37-52, 2007.

(平成30年1月10日受理)

## Subjective Well-being in the Old-old and the Oldest-old from the Perspective of the Feeling of Connectedness and Gerotranscendence

Satoko ONO and Yoshiharu FUKUOKA

(Accepted Jan. 10, 2018)

Key words : feeling of connectedness, gerotranscendence, subjective well-being, old-old, oldest-old

### Abstract

Tornstam suggested the theory of gerotranscendence concerning successful aging in the very old age. However, in Japan, certain differences with his theory have been suggested. Among such issues, this paper focused on the importance of “feelings of connectedness”, and examined correlations among feelings of connectedness, gerotranscendence, and subjective well-being of elderly people using aged care facilities, with deteriorating physical functions. Semi-structured interviews were conducted with the elderly (N=7), which confirmed that they narrated feelings of connectedness. Subsequently, a questionnaire was administered to oldest-old (N=53) and old-old people (N=58). Partial correlation analysis was conducted after controlling ADL. The results indicated that in old-old people, only the feeling of connectedness was significantly and positively correlated with subjective well-being, whereas in oldest-old people, both the feeling of connectedness and gerotranscendence had significant positive correlations with subjective well-being. Moreover, there was a significant positive correlation between the feeling of connectedness and gerotranscendence, and the correlation coefficient was larger in the oldest-old compared to the old-old. These results suggest that the feeling of connectedness is an important factor in successful aging and that gerotranscendence is also important in very old aged people.

Correspondence to : Yoshiharu FUKUOKA

Department of Clinical Psychology

Faculty of Health and Welfare

Kawasaki University of Medical Welfare

Kurashiki, 701-0193, Japan

E-mail : [fukuoka@mw.kawasaki-m.ac.jp](mailto:fukuoka@mw.kawasaki-m.ac.jp)

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.27, No.2, 2018 313 – 323)

